



木村光子¹・工藤孝浩²：神奈川県・瀬戸神社の「無垢塩祓ひ」神事とアマモ

神奈川県横浜市の瀬戸神社には、古来アマモを用いた「無垢塩祓ひ」の神事が行われていたと古老の語り伝えがある。社殿は京浜急行・金沢八景駅近くに位置し、東京湾につながる平潟湾に面している。国道16号線を挟んだ向かい側には弁天島が海に向かって延びている(図1)。このあたり一帯は気候温暖で、波静かな海域は海藻の繁茂する豊かな漁場であった。縄文時代早期(1万2千年～7千年前)から人が住み、夏島貝塚(9450年前)をはじめ野島や称名寺などいくつもの貝塚が点在する。鎌倉時代には塩の産地で、海上交通の要となり、江戸時代以降は観光地として賑わい、明治以降は海苔の養殖も行われた。しかしその後の大規模な埋め立てと、軍事・経済活動によって湾岸一帯の環境は激変する。市街化に伴う水質悪化のため藻場は消失し、景勝地とは程遠い海域となり、アマモの消滅とともに「無垢塩祓ひ」の神事も途絶えた。

このような状況の中で市民を中心としたアマモ場の再生活動が始まり、以来再生されたアマモ場では定期的な生物調査

が行われている(工藤2010)。

こうした活動に呼応して、瀬戸神社では7月の大祭「天王祭」での「無垢塩祓ひ」の神事が復活し、およそ80年ぶりにかつての祭りの姿が蘇った。神事の実際と歴史を、藻場と人々の生活との関わりから考察し報告したい。

瀬戸神社

瀬戸神社の起源は古代に遡り、神社西隣から貝塚と祭祀遺跡が発掘され、石製の勾玉や管玉などの遺物が出土している(佐野1998)。中世には瓢箪型をしていた平潟湾の狭窄部には干満のたびに激しい潮流が生じ、その難所に瀬戸の守りとして人々が海神を祀り、古代から長く崇敬してきた。「新編武蔵国風土記稿」(間宮1804)や社伝によれば、源頼朝が伊豆三島の神を勧進したとの由来があり、海と山の神である大山祇命を主神とし、配祀として須佐之男命、菅原道真、他に八柱の神と、弁天島には摂社の琵琶島神社に宗像三神の内の市杵嶋姫命を祀る。他方鎌倉鶴岡八幡宮とのつながりも深く、宮司の佐野家は八幡宮の職掌(神楽男)としてその伝統を今に伝える社家の一つでもある。

また金沢の穏やかな湾は、紀伊から伊豆半島、房総などを結ぶ海上交通の要となり、唐船も寄港する港であったと伝わる(間宮1804)など、航海と港の守り神として源頼朝以後、小田原北条や足利、徳川まで時の権勢者の信仰も厚かった。社領は広く金沢領の三村の内一村を所領としたといい、江戸時代には百石を寄進されている。

アマモ場の消失と神事の途絶

金沢は古く六浦と呼ばれ海岸の村々は漁撈を生業としていた。瀬戸神社周辺の海域は古来豊かな藻場を形成し、明治の漁場調査資料に「羽根田(羽田)から神奈川に至る海岸は平地で干潟を有し、あじ藻(アマモ)が繁茂し、小柴崎付近の藻場はまる藻及び中ノ藻が六尋(約108m)広がり、小柴海岸の中五間(約90m)ばかりはなら藻(コアマモ)なり」とある(農商務省水産局1900)。その後の調査でも、関東大震災(1923)後まで、ニラ藻を藁と切り混ぜ発酵させた肥料として利用したことなどが述べられ(大島2003)、少なくとも1920年代まではアマモ場が存在していたことがわかる。

しかし明治期以降は、平潟湾に隣接する横須賀が軍都として発展し、湾口部が埋め立てられて(図1)軍事施設と関連工場が立地した。それに伴う流域人口の増加や、産業・生活廃水の増加によって、昭和初期には湾内の水質汚染が顕在化した。高度経済成長期には、軍による埋立地に自動車工場とその関連工場群が進出するとともに、流域の丘陵地帯が開発

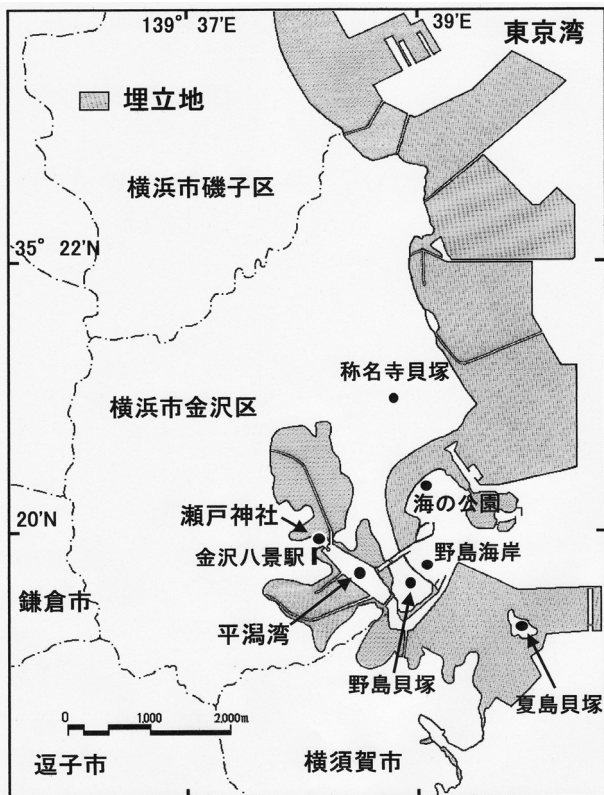


図1. 横浜市金沢区周辺の海岸線の変貌と瀬戸神社・平潟湾(横浜市港湾局編から改写)。

され、水質汚染は一層深刻なものになった（横浜市港湾局編1992）。

古老漁師によれば平潟湾内のアマモ場の衰退期は1950年代に遡ると推定され、筆者の一人工藤は少なくとも1970年代には消滅している事を確認している。「無垢塩祓ひ」の神事は1930年代以降の戦時下において途絶えたと言われ、その頃から急激に進行したアマモ場の衰退が神事の存続を困難にした決定的要因と考えられる。

「天王祭」における「無垢塩祓ひ」の神事復活

2000年に至り、かつての豊かな海を取り戻そうと市民を中心とした様々な主体の協働によるアマモ場の再生活動が始まった。平潟湾に隣接する野島海岸と海の公園にアマモ場が定着・拡大するとともに活動に参画する主体が増え、2010年からは瀬戸神社宮司・佐野和史氏が参画した。そして同氏の発意に市民らが協力して、2011年7月の「天王祭」において神事が復活した。

「天王祭」は祭神須佐之男命を天王として神輿に遷座し、町内を巡幸するものである。古くは7月7日から14日にかけて行われたが、現在は直近の日曜日から行われる。2011年は7月3日（日）の午後3時より始められた。

まず本殿（図2）下の広場に神輿が安置され、それに向かって左側に4人の神職が並び、右側に3名の「無垢塩祓ひ」を勤める所役が白鉢巻、白法被、禪姿で、並ぶ。前面に下がって氏子や参列者が並ぶ。右側に神饌として酒、米、塩、コンブ、キュウリ、スイカが置かれた。キュウリのお供えは祭りの元の姿を示すと考えられ、夏の早魃や洪水、疫病除けを祈願する農民たちの川や水の神を祀る行事であったろう（佐野1968）。

次いで大麻所役によって神輿、玉串、神饌、祭員、参列者がお祓いを受ける。そして3名の所役が前に進み出、神職よりそれぞれ刈取り鎌、潮汲み桶、祓へ串（図3）を受け取る。「無垢塩祓ひ」所役は社域を出て道路を横切り弁天島へ向かう。島へ通ずる道の脇には福石があり、そこで法被を脱いで石にかける。ここからは駆け足で島端へ行き、梯子を降りて海へ入る。刈り役は海中に潜ってアマモを刈り、各自が一筋のアマモを口にくわえる（図5）。これは所役自らの浄めの形とされる。次に祓へ串にアマモを4本挟み、他は手桶に入れると海から上がり、福石まで駆け戻る。再び法被を着て社殿前へ向かい（図4）、鎌、桶、祓へ串を神職に手渡す。

やがて太鼓が打ち鳴らされ、オーっという警蹕の掛け声と共にアマモの祓へ串を手にした先導役に続き、神輿の遷御が

行われる。神輿への遷御が終わると、所役3名は桶の中のアマモを奉書で巻き、麻紐で縛ったものを四本つくり三方に載せて準備する（図6）。

奉書で巻いたアマモは白丁の手によって神輿の四方の蔵手に結び付けられた（図7、9）。すでに神饌が神輿に供えられ、ここで祝詞が奏上される（図8）。玉串が供えられた後神饌が下げられ、全員で一拝、一連の神事は終了。こうして神輿は出御となった。アマモの祓へ串を持つ神職を先頭に神輿は社を出発してお旅所まで渡御する（図10）。祭りはこの後7月5日の三ツ目神楽・湯立神事と続き、最終日12日の神輿町内巡幸へ至る。

平潟湾には未だアマモ場は再生しておらず、神事には事前に野島海岸から移植したアマモが用いられたが、祭の間「祓へ」となった「塩草」のアマモは瀬戸神社のお守り「牛王宝印」の紙に添えられ、蘇った神事の象徴となった（図11左）。神事の復活によって、アマモが自生する平潟湾の環境を取り戻したいという地元の機運は高まりを見せている。

考察

瀬戸神社の「無垢塩祓ひ」には伊勢を発祥とする神事の影響が色濃く見られる。

「本草綱目啓蒙(1809)」や「享保元文諸国産物帳集成」(1735～1738)にも勢州ではアマモをムクシオ・シオグサと呼ぶとあり、伊勢市の二見興玉神社では船でアマモを刈り取る「藻刈り神事」が行われる。これは毎年5月21日に、二見浦の夫婦岩の沖合にある興玉神石周辺で無垢塩草（アマモ）を刈り取り、天日に干して祓具・不浄祓い守りとするものである。二見浦は伊勢神宮に参拝するにあたり、身を清める「浜参宮」（禊ぎ）の霊場であることから、禊ぎに代わる無垢塩の祓いを行い、神の依り付く神聖な場所に茂る霊草である塩草を、お守り（図11右）として分け与えるとしている（二見興玉神社社務所）。無垢は清らかさを意味し、清浄な海に繁茂するアマモはその象徴であると考えられている。

海藻をお祓いや清めに用いる例は全国に多く、中でも出雲の佐太神社や（濱田2008）、福岡の宮地嶽神社（濱田2009）、志賀海神社（濱田・木村2011）などはホンダワラ類を主とした西日本での海藻文化圏を構成している。「無垢塩」（アマモ）は海草であるが、この神事における意味は西日本の海藻文化に共通するものであろう。

関東地方でも海藻が神事に登場する例は幾つか残っており、例えば鎌倉鶴岡八幡宮の9月例大祭では、初日の早朝神職総出で浜へ降り、海へ入って禊を行う。その際海中から海

図2-11、「天王祭」における「無垢塩祓ひ」の神事とお守り。2. 緑に固まれた瀬戸神社の本殿。3. 左から無垢塩祓ひに用いる祓へ串、潮汲み桶、刈り取り鎌、三方の上に紐と奉書。4. アマモの刈り取り後に鎌、桶、祓へ串を手にした社域へと駆け戻る無垢塩祓ひの所役3名（神奈川新聞社提供）。5. 所役は海中に入ると、自らの浄めの形として一筋のアマモをくわえてアマモを刈り取る（神奈川新聞社提供）。6. 桶中のアマモを奉書で巻き、麻紐で縛ったものを用意する所役。7. 奉書で巻いたアマモは、白丁の手によって神輿の四方の蔵手に縛り付けられる（神奈川新聞社提供）。8. 神饌を供えた神輿を前に、宮司による祝詞の奏上。9. 神輿の四方の蔵手に麻紐で縛り付けられた奉書で巻いたアマモ。10. 社域を出て町内を渡御する神輿（神奈川新聞社提供）。11. 祭りの間に「祓へ」となったアマモが添えられた瀬戸神社のお守り（左）と伊勢市の二見興玉神社のお守り「無垢塩草」（右）。



藻を採って持ち帰り、社域の各所に置いて清めとする。この時の海藻はホンダワラ類やアラメ・カジメであるが「塩草」(しおぐさ)と呼ばれる。また藤沢や鎌倉の腰越^{こしこえ}、坂ノ下でも神事や正月などに人々が浜で海藻を拾い清めとする習慣があり、これらの地域では海藻を「モク」、一部では「シヨクサ」と呼び、三浦半島の佐島、長井、松輪など沿岸一帯に共通の呼び名となっている(辻井1975)。更に千葉の銚子では20年に一度の大神幸祭で神輿が通る鳥居を「モクの鳥居」と呼び、地元民が採集したスガモを鳥居にびっしりと巻く(大場・宮田2007)。この地ではスガモを「リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ」、通称「ガンズナ」と言い、人々は祭り終了後鳥居の木と共にスガモを持ち帰る(津田泰也氏談)。「モク」という呼び名は、古くはホンダワラ類を指し、後に海藻を総称する言葉となった「モ」と「無垢」とが混在している可能性も推測される。

鎌倉時代末期、伊勢神宮の社領は千有余に及び、藤沢には大きな所領を有した。元寇後は東国武士の間にも伊勢信仰が浸透し、江戸時代には更に伊勢参りが盛んとなり、様々な階層の人々の間に交流が生まれた。アマモは伊勢信仰と一体となって、清らかさを象徴する特別な海草として広く認知され、関東でもアマモや海藻を用いる神事が行われるようになったのであろう。その中で相模湾沿岸から千葉に至る塩草の文化圏が形成されたと考えられる。

近年、伊勢の二見浦近海でもアマモ場の減退が懸念されており、瀬戸神社における神事の途絶と復活の経緯は、海草生態系の消失が生物多様性のみならず、我が国の伝統文化の存続も危うくするとの警鐘であると言えよう。

謝辞

本調査で、は瀬戸神社宮司^{ぐらじ}の佐野和史氏に大変お世話に

なった。銚子の大神幸祭に関しては世話役の津田葉也氏や雷神社宮司嶋田正氏から情報をいただいた。元富山大の濱田仁博士や国立科学博物館の北山太樹博士からは貴重なご意見をいただき、横須賀市自然・人文博物館の大森雄治氏にはアマモを同定していただいた。これらの方々に謹んで感謝いたします。

引用文献

- 濱田仁2008. お祓いの起源ホンダワラ類と出雲の佐太神社. 藻類 56: 35-38.
- 濱田仁2009. 筑前国・宮地嶽神社の鎮火祭と「モ」. 藻類 57: 152-154.
- 濱田仁・木村光子2011. 筑前国・志賀海神社の歩射祭とガラモ. 藻類 59: 25-28.
- 工藤孝浩2010. 神奈川県におけるアマモ場再生事業. 国立公園 684: 15-18.
- 間宮士信(編纂)(1804). 新編武蔵国風土記稿4巻. 麓田伊人(編集校注)1996. 大日本地誌体系10. pp. 2, 10-13. 雄山閣.
- 農商務省水産局1900. 明治後期産業発達史資料第632巻東京湾漁場調査(上). p. 84. 龍溪書舎.
- 大島暁雄(監修)2003. 日本の漁村・漁撈習俗調査報告書集成4. p. 214. 東洋書林.
- 大場達之・宮田昌彦2007. 日本海草図譜. p. 95. 北海道大学出版会.
- 小野蘭山(1803)1991. 本草綱目啓蒙2巻. p. 113. 東洋文庫. 平凡社.
- 佐野大和1968. 瀬戸神社. pp. 327-328. 瀬戸神社.
- 佐野大和1998. 金沢ところどころ. p. 87. 金沢区役所.
- 丹羽正伯(編纂)(1735-1738)1990. 享保元文諸国産物帳集成5巻. pp. 483-486. 科学書院.
- 辻井善弥1975. やさしい三浦半島の生活史. pp. 110, 167-169. 三浦半島郷土教育研究会.
- 横浜市港湾局(編)1992. 横浜の埋立. 285pp. 技報堂出版.
- (¹ 〒145-0062 東京都港区南麻布2-14-9-2F (株)IDD,
- ² 〒238-0237 神奈川県三浦市三崎町城ヶ島養老子 (神奈川県水産技術センター)